
特別展及び博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業関連シンポジウム

多角的な視点から捉える 地域の文化

—— 博物館における研究の可視化・高度化

—— 要旨集 ——

2021年5月2日 日 13:00～16:40

場 所：国立民族学博物館 講堂（みんぱくインテリジェント・ホール）



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

歴史と地域文化 ― 福島県浜通りの歴史 ―

国文学研究資料館・教授
西村 慎太郎

ここでは福島県浜通りのうち、東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、原子力災害）に伴う帰還困難区域などにおいて、歴史資料を保全し、それらを地域の人びとと共有しつつ、地域の歴史像を構築する取り組みを明らかにするものである。

福島県浜通りにおいて、原子力災害後、県や自治体の文化財担当者、博物館学芸員、ふくしま歴史資料保存ネットワークをはじめとした県内外の様々な人びとの活動によって、歴史資料が救われてきた。筆者もそれらの活動に協力しつつ、「大字誌」の作成を進めている。

簡単に「大字誌」について述べてみたい。大字（オオアザ）とは自治体内にある細かい地域の名称で、多くの大字では明治の町村合併まで、ひとつの行政区=村として成り立っていた。行政・政治・文化など大字内の住民たちにとって最も身近な生活圏である。大字レベルでの地域の歴史と文化を明らかにしようとしたものが大字誌である。先行研究によれば、各地の大字誌における編纂の契機として、例えば、沖縄県の場合、地域が変化していく危機意識によるものであり、世帯レベル（それぞれの家の系図や写真）の記述が詳しいという特徴がある（沖縄県の場合、「字誌」と表現されることが多い）。北海道の場合、開拓の歴史の記念事業として描かれており、アイヌの歴史との分断という問題も抱えている。

筆者が関わっている大字誌は、①浪江町請戸、②浪江町・双葉町両竹、③富岡町小良ヶ浜、④浪江町権現堂である。

①浪江町請戸の海側は防災集団移転促進事業のために居住ができない地である。請戸の大字誌では、区の人びとが中心となって、大字誌編纂が行われた。「歴史編」の執筆を泉田邦彦氏（石巻市教育委員会）に依頼され、古代史を松下正和氏（神戸大学）、近世史を天野真志氏（国立歴史民俗博物館）、近現代史を筆者、請戸湊を井上拓巳氏（さいたま市立博物館）がそれぞれ執筆することとなった。そして、2018年には『大字誌ふるさと請戸』が刊行された。

②浪江町・双葉町両竹は震災復興祈念公園の建設予定地であり、また、浪江町両竹は防災集団移転促進事業のため、請戸地区同様に居住することができない。両竹の大字誌では、両竹出身である既述の泉田氏との雑談の中でスタートしたクラウドファンディングで支援を募集し、2019年から毎年1冊ずつ『大字誌両竹』を刊行している。また、住民と共有するため、双葉町ポータルサイトに「もろたけ歴史通信」を配信している。

③富岡町小良ヶ浜地区は現在でも帰還困難区域に指定されている。小良ヶ浜の資料保全は富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム（歴文PT）によってなされ、大字誌はそのメンバーと筆者とで進めている。小良ヶ浜の場合、近世以前の様相がほとんど分からないため、農業・林業・祭りなどのトピックごとに資料や聞き取り調査の成果などを踏まえつつ叙述することになっている。

④浪江町権現堂の大字誌は2021年3月から始まったものである。権現堂は浪江町の中心地であり、現在は避難指示が解除されているが、急速な創造的復興のため、全町避難以降の歴史や景観が失われつつある。地元住民との意見を踏まえつつ、まずはブログを開設し、毎日更新することで地域の人びととの交流構築を目指している。

大字誌は住民にとって最も身近な歴史・文化を継承するツールであり、それを研究者と地域住民や自治体と協同・協働・共同で作成することに大きな意味があるものと思われる。

方言と地域文化 ―八重山の方言と東北の方言―

国立国語研究所・特任教授
木部 暢子

いま、世界中で多くの言語が消滅の危機にひんしている。ユネスコはこのような言語を保護し、もう一度これらが元気を取り戻すようにと、2009年に“Atlas of the World's Languages in Danger”（世界消滅危機言語地図）第3版を公開した。これには消滅が危惧される約2,500の言語のリストと地図が含まれている。日本では8つの言語―アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語―がこのリストに入っている。しかし、消滅が危惧されるのは、この8つだけではない。各地の方言もまた共通語化の波に押されて消滅しそうな状況にある。

方言が消滅するのは時代の流れであって仕方がないという意見がある。その一方で、方言がなくなるのは寂しいという意見もある。どちらにしても、現在、地域の伝統的な方言を守る活動は、あまり活発には行われていない。なぜ、消滅しそうな方言を守らなければならないのか。言語をコミュニケーションの道具と考えるならば、世界は一つの言語で成り立っている方が効率的だ。しかし、言語の役割はそれだけではない。言語にはその土地の文化や歴史、生活の知恵がしみこんでいる。その土地の言葉でしか表現できないこともたくさんある。長野県には「ずくなし」という言葉がある。「根気がない」と訳されるが、標準語に置き換えられない微妙なニュアンスがあると地元の人は言う。もし、「ずくなし」という言葉がなくなってしまったら、「ずくなし」をはぐくんできた地域の特徴もなくなってしまうかもしれない。「ずくなし」の文化があるから「ずくなし」という言葉が生まれ、「ずくなし」という言葉があるから「ずくなし」の文化が保たれる。言語と文化は一体のものなのである。それを私たちの代で終わらせてしまっているのだろうか。先の質問に対しては、逆にこの問いを返したい。

ただ、時に方言は、人と人を隔てる壁にもなる。2011年の東日本大震災のときには、全国から東北にやってきたボランティアから「東北方言がわからない」という感想が寄せられ、地元の人からは「ボランティアの話すことばに親しみがもてない」という感想が寄せられた。災害のような非常時には、方言はじゃまな存在なのだろうか。そうではない。災害時こそ方言が必要なのだ。このことは、震災のあと、復興のスローガンとして東北方言の「がんばっぺし」が各地に掲げられ、それだけでなく全国から東北に向けて「ちばりよー 東北」（沖縄の方言）、「がんばってや！東北」（大阪四條畷の方言）のような「方言エール」が届けられたとき確信した。仲間内で使われる「ちばりよー」や「がんばってや」という言葉で呼びかけることにより、自分たちも東北の人と同じグループの隣人として応援しているよ、という沖縄や大阪の人たちの気持ちが伝えられたのである。方言がなくなってしまったら、遠くの人たちのこんな思いはどうやって伝えるのだろうか。

沖縄の八重山地方では、今から250年前に起きた明和の地震と津波で多くの人々の命が一瞬のうちに失われた。特に石垣島南海岸の被害が大きく、琉球王朝は津波後、近隣の波照間や小浜島の人たちをここに移民させ、復興を担わせた。そのとき、元から居た人たちと移住した人たちの間にどのような軋轢が生じたかは想像するしかないが、現在の方言を見ると、移住した人たちが自分たちの文化を守りながらも移住先の石垣に溶け込もうとしたことがわかってくる。言語はまさに人々の生活と一体のものなのである。

このような言語を展示するには、どうすればいいか。言語は目に見えない。しかし、方言の価値をわかりやすく地域の人に伝えるためには、方言を可視化する必要がある。そのために、私たちがどのような工夫をしたかについて報告したい。

環境と地域文化 ― 滋賀県比良山麓の恵みと災い―

総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科・准教授
吉田 丈人

自然は、私たちに多くの恵みをもたらすと同時に、しばしば災いをもたらす。さまざまな自然の恵みが私たちの社会や生活を支え豊かにしてくれる一方、同じ自然が時として厳しい災いとなる。人々は、自然の恵みと災いから絶え間なく影響をうけるなかで、人と自然の関わりの歴史を紡いできた。災いは忌み嫌われ、さまざまな技術の発展とともに、災害を減らすことに成功してきた。しかし、災いのすべてを技術の力で押さえ込むことは、現代にあっても不可能である。現代の技術が発展するより前の時代には、人はどのようにして自然の恵みや災いに付き合ってきたのだろうか。長い時間をかけて、人が自然とつきあうための豊富な知識や知恵が、それぞれの地域で文化として築かれてきた。しかし、現代の技術が発展する一方で、そのような地域文化が忘れ去られようとしている。

本講演では、滋賀県琵琶湖に近い比良山麓の地域に焦点をあて、自然の恵みと災いの関わりと、それに关わる地域文化の一端を紹介する。琵琶湖の西に位置する比良山地には、標高1,000mを超える高い山々が連なっており、東側の斜面は急峻にくだって琵琶湖に達する。比良山地からはいく筋もの川が流れ出し、山を削り、運ばれた石や砂が麓につもって扇状地をつくっている。大小の川が流れ込む琵琶湖の岸边には、山から運ばれた砂がたまり、砂浜や内湖ができています。

人々は、比良山地と琵琶湖にはさまれた扇状地下部から湖岸にかけての狭い場所に集落を築き、古くから住んできた。地域に残っている近世の頃の古絵図には、集落の周囲に田畑が描かれており、村明細帳などの古文書からは、米などの穀物や野菜がつくられてきたことがわかる。地域の人々の生活は、そのような田畑から収穫されるものに加え、山や湖がもたらす多くの恵みにも支えられてきた。比良山地から琵琶湖に広がる景観のなかで、自然の恵みを巧みに利用しながら、地域の人々は生きてきた。

比良山地の山々はさまざまな恵みを地域にもたらす一方で、大雨が降った時には、土石流やがけ崩れといった土砂災害の災いをもたらす。近世には、扇状地を流れ下る川が大きく流路を変え、集落の住宅や田畑が流され、土石流によって運ばれた石や砂により荒地が広がったことがあった。また、山の大規模ながけ崩れは、集落全体を土砂に埋めたこともあった。幾度もの厳しい災害を経験するなかから、土砂災害の被害を避けるように集落の立地場所が工夫されてきた。

土石流やがけ崩れは土砂災害の災いをもたらす一方で、山から石を運び出す力にもなっている。比良山地をつくる花崗岩やチャートは、地域の石工たちによって石材として利用され、伝統的な石の文化と産業が地域に育ってきた。同じ石が、地域の集落を築くためにも使われてきた。山から水を引くための水路、住宅の土台、棚田を支える石積みなど、さまざまな用途に使われている。

集落や暮らしを自然災害から守るためにも、石がふんだんに使われている。扇状地を流れ下る川の側には石積みの大きな堤がつくられ、川の流れをその場所にとどめる役割を果たしている。また、川から溢れ出した土石流の勢いを削ぐために、石積みの堤が二重・三重に配置されている。集落の周囲には、シシ垣と言われる石垣が巡らされ、イノシシやシカを遠ざけるとともに、水害を防ぐことも兼ねられるよう堅牢な造りになっている。琵琶湖の湖岸には、波除の石積み護岸も見られる。

山から里へ里から湖へとつながる比良山麓では、自然の災いである土砂災害を避けながら、自然の恵みである石の資源を巧みに利用する人々の暮らしが、脈々と営まれてきた。進みつつある気候変動や社会経済が大きく変化するなか、自然がもたらす災いにどう向き合っていくべきか。比良山麓で築かれてきた地域文化に、豊かな学びの場が用意されている。

映像のなかの地域文化 ―石川県輪島市皆月の過去から未来へ―

国立歴史民俗博物館・准教授
川村 清志

民俗映像を撮るという行為は、インタビューや参与観察を中心とした民俗調査に比べて、かなり異質な要素を孕んでいる。撮影の意図を説明したり、公開することの同意を得たりする作業は、地域の日常生活を記録する営みからは逸脱している。撮影されるという意識の変化は、インフォーマントの日常生活を歪曲させかねない。また、撮影された映像は何らかの形でアウトプットすることが前提となっている。利活用ありきの調査は、民俗誌を作成するための基礎的で持続的な調査よりも、応用的な目的を意図したスタイルに近い。

ただここで紹介するのは、その応用的な地域への介入が、時には基礎的な資料の再発見と保存に向かう可能性や、地域社会の内部での積極的なメディアによる自己表象を予見させることを紹介したい。

端緒は、2014（平成26）年からはじめた夏祭りの映像製作である。そこで主題としたのは、石川県輪島市門前町の皆月でもっとも大きな行事、皆月日吉神社の山王祭である。毎年8月10、11日に行われる夏祭りの準備段階から後片付けまでの一連のプロセスを記録した。祭りの花形たる曳山を担う青年会員の活動に焦点を当て、同時にナレーションや背景音、題字など多くの場面で、彼らとの協働作業のもとに作品を完成させた。

映像撮影の過程で発見されたのが、皆月の刺し網漁の親方をつとめていた升本家に残されていた16ミリフィルム（屋号の名からショウゴロウフィルムと呼ぶ）である。撮影されたフィルムはこれまで17本確認されており、戦前から昭和30年代初頭にかけての映像と考えられる。時期をある程度特定できる場面として、尋常小学校の文字が記された地元の運動会の様子や、特別史跡と記された輪島市白米の千枚田の看板がみえる。これらのモノクロのフィルムには、半世紀以上前の皆月とその近隣の風景が映される。

ショウゴロウフィルムは、保存状態が比較的よかったため、歴博でデジタル化を行い、各々の映像に聞き取りからえた情報を加えてデータベース化を進めている。また、映像資料は地域に還元し、地元の公民館活動などでも利用されることになった。

他方で、自己表象としてのビジュアルイメージとして、同じ日吉神社の春祭りの映像を制作した。春祭りは毎年4月最初の土日に行われる。曳山は出ないが、神輿を村の青年会や壮年層が担いで回っていた。しかし2007（平成19）年から、村方に負担をかけないために、神輿の行列が休止となる。祭りの縮小自体はその年の正月の大寄合で決められていたが、3月に起きた能登沖地震による被害がそれに追い打ちをかけた。その後10年近くにわたり、祭りは神社での神事と直会のみになった。

新たな映像作品では、青年会が2016（平成28）年から2018年にかけて取り組んだ神輿渡御の復活の過程を紹介することになる。これらの営みを記録した映像や画像は、研究者だけでなく青年会員やその近親者が積極的に記録したものである。これらの映像や画像と当事者たちの語りをコラージュしながら、現在進行中の地域文化を当事者たちが積極的に描きだす民俗誌映像を紹介したい。

アジアにつながる地域文化 ——上海・長崎・大阪という文化街道——

国際日本文化研究センター・教授
劉 建輝

従来、日本近代の開幕を論じるにあたって、誰しもがオランダとの交流を取り上げ、長崎・出島の果たした役割を強調してきた。しかし、それはあくまで歴史真実の一面に過ぎず、同じ時期に、実はより多数の西洋情報がむしろ中国の上海から伝来し、幕末のさまざまな動向に大きな影響を与えていた。

阿片戦争後の上海には、多くの西洋列強の資本が殺到したのみならず、プロテスタントを中心とする各国の宣教師もたくさん集まっていた。彼らはいわゆる書籍伝道を展開し、西洋の歴史や地理、また物理、医学などの紹介本を数多く刊行した。「漢訳洋書」と呼ばれたこれらの漢文書籍はその後、日中間の伝統的な貿易ルートに乗ってほとんどが長崎に舶来し、海外情報を渴望していた幕府や各藩の武士たちの手に渡っていた。

その際、両者の仲介役として大きな役割を果たしていたのは、出島と並んで、長崎のもう一つの対外窓口である唐人屋敷であった。17世紀後半に設立された唐人屋敷には、日中間の交通の便利さもあって、当初から貿易船の船主のみならず、中国江南一帯のいわゆる文人墨客もたくさん渡来し、中には一部長期滞在者もいた。彼らとの交流を目的に、日本の各地から多くの知識人が来訪するが、それがまさに長崎遊学の一部を構成していた。大阪出身者の例で言うと、たとえば博学者で、南画家の木村蒹葭堂がすでに安永7（1778）年に長崎を訪れ、唐人屋敷などで現地の人たちと交友していた。

そして、この傾向が幕末に近づく、さらに盛んになっていく。出身地こそ土佐だったが、後に大阪で事業を起こした三菱の創業者であった岩崎弥太郎が慶応2（1866）年、こちらも清朝などの海外事情を把握するために藩から長崎に派遣され、一時頻繁に唐人屋敷などに入出入りし、唐通事たちと交流していた。それにもう一人、大阪の近代商工業の成立に大きく貢献した五代友厚も岩崎とほぼ同じ時期に、それこそ上海に拠点を置く英国資本のジャーティン・マセソン商会の代理人であるトーマス・グラバーと合弁会社を起こし、早くも実業家としての手腕を発揮していた。

ちなみに五代ははじめて西洋近代に開眼したのも本人の文久2（1862）年の上海渡航であり、この時の体験は彼の大阪税関長時代に尽力した川口波止場の改修や川口外国人居留地設置などの事業に深く関連していると思われる。このように、近代と前近代を問わず、われわれがたとえば大阪という地域の文化を考える時、その先は明らかに長崎、さらに海の向こうの上海などにつながっており、まさに人々の移動や体験がその成立を可能にしている。その意味で、地域文化とは単に「人と人をつなぐ」のみならず、同時に内外において「人と人がつなぐ」ことで成り立っているものでもあると言えるかもしれない。

本発表では、かつて人的・物的交流によって形成された上海・長崎・大阪という文化街道の存在を振り返り、それらが各地の地域文化にいかなる影響をもたらし、またいかなる外部への通路を作り出したかについて、できるだけ具体例を提示しながら明らかにしていきたい。

日々の暮らしと地域文化 ―新潟県奥三面の山の暮らし―

国立民族学博物館・教授

日高 真吾

1. はじめに

本発表では、地域文化を教育資源として適切に活用するための方法論を見出すために開発した「地域文化の宝箱」の概要と、今後の展望と課題を示す。本テーマは、2011年の東日本大震災でおこなった文化財レスキュー事業の経験が大きなきっかけとなっている。発表者は、文化財レスキュー事業後、救出された文化財群が地域に返却された際、当該地域でこれらの文化財の活用を考えられる状況にまで復興が追いついていないという課題に直面した。また、民俗資料は所在している地域の文化を表象できる情報を内包しているものの、その情報をどのように地域で活用するのか、どのようにその活用を継続していくのかなどの課題に取り組む研究がまだまだ少ないことに気づいた。

そこで、地域住民が、自分たちの地域文化に気づくための教育資源としての活用を目指し、国立民族学博物館ですでに運用している教育キット「みんなの宝箱」を参考にしながら、「地域文化の宝箱」を製作し、実践研究をおこなうこととした。

2. 「地域文化の宝箱」の概要

「地域文化の宝箱」とは、博物館や資料館で所蔵される民俗資料について、学校等で能動的に学べることを目的に製作した教育キットである。そして、この教育キットには、「博物館・資料館見学の事前学習、事後学習に役立てることができる」、「地域に学びの場を広げることができる」、「主な利用対象は、地域の博物館・資料館の見学をおこなう予定の小学生とする」という3つのコンセプトが盛り込まれている。また、授業時間に配慮した適度な内容量、興味を持ってほしいポイントの明確化に留意した。そのポイントとは、①いわば博物館施設の予告編であり、見どころは博物館にあるということ、②コンパクトな学びも深い学びもできること、③先生と児童・生徒と一緒に学びを進められること、④利用者がもっと知りたくなる気持ちと呼び起こすこと、⑤もっと知りたくなった意欲にこたえる道筋・方向を示す機能を備えていることという5つである。

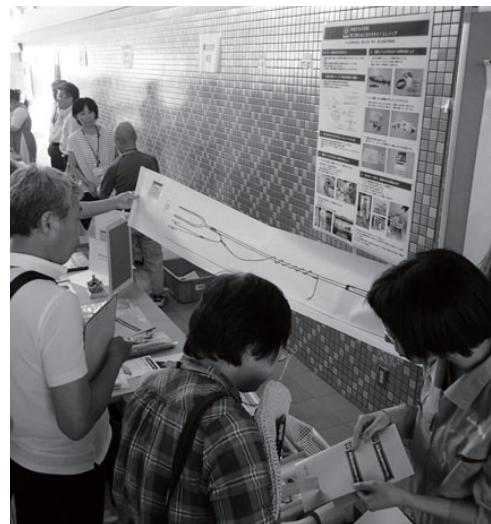
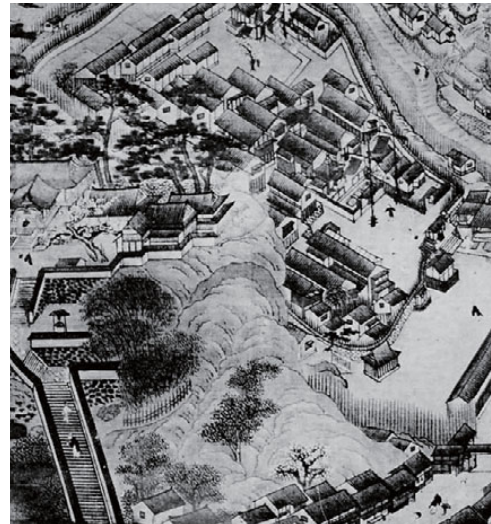
3. 「奥三面の山に生かされた暮らしパック」の概要

「奥三面の山に生かされた暮らしパック」は、新潟県村上市の奥三面歴史交流館「縄文の里・朝日」と連動した教育キットで、今は奥三面ダムに沈んだかつての奥三面の暮らしの文化をテーマとしている。ここでは、奥三面の山の資源を効果的かつ持続的に活用してきた文化として、1) 奥三面ダムに沈む前の奥三面の集落、2) 縄文時代の奥三面、3) 狩猟文化、4) 漁撈文化、5) 採集文化という5つのテーマをパックしている。

4. 今後の展望

「奥三面の山に生かされた暮らしパック」は、本来は2020年度から本格運用をおこなう予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で、まだ実現できていない。そうしたなかで、村上市の教師とのディスカッションでは、奥三面の山の暮らしの文化がなぜすごいのかを子どもたちにどう伝えるのが難しいという意見がだされた。この点は、これまで学社連携や博学連携がなかなか定着できずにきた大きな要因でもあり、まずは製作側の発表者や村上市教育委員会、連携博物館である縄文の里・朝日とともにしっかり伝えるための授業内容を検討しているところである。その解決策の一つとして、教師から、いわゆる「よそ者」である発表者が、なぜ奥三面の山の暮らしの文化について高い関心を寄せたのかについて、子どもたちと近隣の学校の教師も含めた研究授業で伝えて欲しいという要望があげられた。そこで、まずはこの要望に応えることを考えている。またこの点は、研究者が研究対象者に研究成果をどのように還元するのかという課題に対しての先行事例のひとつになる可能性を感じている。

今後は、本格的に「奥三面の山に生かされた暮らしパック」を運用するにあたって、利用する教師の利便性、子どもたちの反応、管理する縄文の里・朝日の課題等を見出し、解決策を検討しながら運用体制を構築する。また、こうした活動を通して研究の可視化・高度化の可能性をさらに考えていきたい。



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology